

聞き取り調査

エトロフ・樺太抑留記

新潟県 青島 藤 太

一 出生から入隊

- ①新潟市において大正八年出生。新潟県立新潟商業学校（現新制高校）卒業。卒業後通信省（郵政省）に奉職。

②両親と兄三人、第一人、妹一人、計八人家族。私には四男。昭和十五年入営。

二 ソ連軍侵攻前

- ①昭和十九年召集で仙台四連隊に入隊。千島エトロフ島に移駐。第八九師団、旅団、独歩、工兵隊、

通信隊、病院等。

三 ソ連軍侵攻

- ①昭和二十年エトロフ島で、八月中旬頃ソ連軍が上陸して武装解除される。

②二の①と同じ配置。

四 終 戦

- ①北海道の日本軍からの情報で知った。特に混乱なし。

②武装解除。

- ③長期軍歴により現地除隊となったが、北海道からの船の連絡がなく、現地の漁業関係者の家族と同居していた。ソ連軍が上陸後、前軍人であることが判明したのでソ連軍に抑留された。現地人は内地へ送還されたと思っている。

五 抑留地の生活

- ① エトロフ島で二年、樺太で一年抑留生活。
- ② シラミ発生予防のため、衣類等は熱湯煮沸で消毒し、頭部、陰部の毛を強制的に剃らされ、ソ連軍医の検査があった。抑留中二回実施された。身体検査は抑留中三回くらい簡単な検査。お尻の肉の強弱度により実施された。病気であっても三十八度以上でないと言役は従事させられた。
- ③ エトロフ島で五百人くらい、樺太で八百人くらい。

六 労 役

- ① 道路作業、建築作業、砕石作業、船の荷役作業、木材の伐採作業、山から木材を川に沿って麓までの搬送作業等。
- ② ノルマ達成主義で、時間よりノルマ達成の重点主義だった。
- ③ 達成しない場合は午後十時ごろまで作業し、未達成の場合は翌日のノルマに上積みされた。達成した場合は帰隊し収容所に帰った。
- ④ 見えないところを省略し、外面上達成したように

見せかけ、要領よく作業した。

- ⑤ 空腹と寒さが体力消耗で一番身に沁みた。
- ## 七 抑留者の統制管理

- ① 特に基準はなかったが、経験者は優先してその作業をした。その他はロシア側の指示によって作業した。
- ② ①とほぼ同じ。
- ③ 病気以外は特に認められなかった。
- ④ 自分自身で管理する以外にはなかった。
- ⑤ 作業の監視は厳しかった。
- ⑥ 支給は少なく、寒さの予防について、毛布などを切って身にまとい、靴下の代用として使用した。
- ⑦ 一応三食支給されたが、質量とも少なく、黒パン一片と塩汁のみであった。肉、野菜はほとんどなし。時計や被服等をソ連兵とパン、タバコなどと交換した。ソ連兵の希望する品物を作製してパンなどと交換。荷役作業の際、食料品を盗んで食事の代用とした。
- ⑧ 一週間に一回くらいで、ない場合もあった。甚、

将棋、花カルタ等で過ごした。

⑨倉庫、草で収容所を作製、三角兵舎などであった。

衛生状態は不良。狭いため就寝時の寝床の幅が五十センチメートルくらいで、みんなで密着して就寝した。寒くて安眠できなかった。

⑩夕食後二時間くらい、政治係将校によって日本語で赤化思想教育が行われた。

⑪特になかった。

⑫草ぶきの収容所（樺太）で火災を発生させて、責任者は一週間営倉へ入所した。

八 抑留中の生活と極限状態における意識

①一日も早いダモイの気持ちをお覚し、精神力と気力で生活していた。人間的な扱いではなく、虐待にひとしい重労働であった。

②希望を持って必ずダモイまで我慢の一言であった。さもなければ死にたい気持ちになったこともあった。

③健康保持に充分注意し、就寝時間が最高の楽しみであった。常に信仰心を持った。

九 帰還

①樺太の真岡収容所で知った。

②樺太の古屯から汽車で真岡収容所へ。

③乗船は円滑であったが、乗船後下船させられることがあったので、出港するまで不安だった。

④日本船の乗務員の温かいもてなしで、嬉しく感謝した。「リンゴの歌」を聴き楽しかった。

⑤函館への上陸は昭和二十三年九月六日。

十 帰国後の生活

①帰宅後、健康診断を受け約一カ月間休養し、職場復帰した。南方従軍、北方移駐、抑留等の約十年間の軍隊生活で、職場復帰の順応に大変苦労した。

②帰国後、連合軍（GHQ）に出頭を命ぜられ、約一週間取り調べを受けた。内容は主として、千島、樺太在所中の土地について、ソ連の軍備配備状況について、書類に図示して提出を求められた。

また、帰国後約一年間くらいの間、特高警察により家庭訪問、赤化思想について私の考え方を聴取された。その後は肉体的にも精神的にも安泰と

なり、生活も順調で現在に至っている。

私の人生の中での南方従軍（特にガダルカナル島の戦闘参加）とソ連抑留の辛苦は、一生忘れることのできない出来事である。

ソ連抑留記

千葉県 白駒 政夫

昭和二十年八月十五日終戦となり、我々は横道河子で武装解除され牡丹江に集結させられた。一個大隊二千名ずつ編成の上、五個大隊でソ連の命令により、近くの鉄道の駅まで行軍が行われた。数日後到着したところはニコリスタ地区であった。

そこが第二集結地であり、収容所は天幕作りの簡単なものであった。その間、ソ連の給食を受けたが、ほんの少量で腹が減り、全く困ったことでした。小さい黒パンとスープだけでは日本人の空腹を満たしてくれなかった。

一夜明けた朝、点呼が行われた。早速ソ連軍の命令で、作業区分ごとに班の編成が行われた。農場に行く者、貨車の積み下ろし、大工作業、その他炭鉱に行く者など多種多様。私は炭鉱作業に回された。初めは炭鉱に入ると山鳴りがしてこわかったが、数日後には慣れて不安ながら作業ができるようになった。作業は一日三交代で、一交代は八時間勤務であった。作業も大変だが、食糧の配給が少ないのが一番困った。一カ月ぐらいするうち、病人も多数出始めた。栄養失調という病気が多かった。炭鉱も二、三カ月すると抗外作業者との交代が行われた。

農場作業にも回されたが、秋は馬鈴薯掘りも行われ、空腹のため、現場で生で薯をかじり空腹を凌ぐ日が続いた。食べてもうまくはなかったが仕方がなかった。夜収容所に帰り、夕食後しんみりとしたころは毎日祖国のことが思い出され、ほんとうに我々は日本へ帰れるのかどうか大変に心配であり、頭がおかしくなり、かといって自決するのも考えものであり、その上、強制労働と不安の続くうち、ついに四年が過ぎた。自分